

# 居場所の役割についての考察

A consideration about the ibasho

伊 勢 真理絵

Marie Ise

中 野 靖 彦

Yasuhiko Nakano

## 1 問 題

### 1-1. 心の居場所を求めて

現在、子どもを取りまく環境が変化しており、それに伴って、心の居場所づくりが叫ばれるようになった。安齊（2003）は居場所の変遷について「1960年代に『登校拒否』という言葉が広く用いられるようになり、『学校恐怖症』として問題視され、学校に登校できなくなった子どもたちは、本来学校に行くべきものという社会の厳しい視線にさらされ家庭にも居られず、『居場所』を失うことになった。そこで不登校の子どもが安心していられる『居場所』づくりが必要になってきた」としている。1980年代半ばになると不登校児童の親たちが、学校に行けない子どもたちのための居場所として東京シュールがつくられた。この出来事が居場所という言葉が心理的に用いられ始めたきっかけであり、フリースクールやフリースペースといった学校外の居場所として注目されるようになった（石本 2009）。

### 1-2. 居場所の定義について

居場所の本来の意味は広辞苑（第5版）によると「いるとこと、いどころ」であり物理的な意味合いが主体である。しかし、不登校問題で居場所という言葉が用いられるようになって以降、心理的な意味で用いられたり、物理的なものと心理的なものの両面を表すものとして用いられたりしている（石本・倉澤 2009）。

居場所の定義には大きく分けて2つの方向性があると考えられ、物理的と心理的なものの両面を指すものと、物理的、心理的どちらか一方を指すものと区別することができる。

具体的に広義を指すものは、居場所を捉える上で物理的側面と心理的側面が重要であり、どちらか一方を主張するのではなく、両方の側面を同一上に考えていくことが広義の意味であると想定される。

狭義における居場所は心理学の分野を取り上げて考察すると、物理的側面よりも心理的側面を重要視しており、人との関わりから居場所が生まれるという認識の下定義していると考ええる。

居場所があると感じる過程には、物理的空間に本人にとって安心できる他者がおり、その場所に行けば、自分を受け入れてくれるという安心感によって居場所があると感ずることができる。そのため、建物や空間に居場所があると感ずる以前に、親しい人の存在によって安心感を得てから、その場所に居場所があると感ずるようになると思ふ。

受け止めてくれる人がいなければ、その場所にやすらぎを感ずることができず、居場所があると感ずにくい。物理的、心理的側面の両方から安心感を得ることで子どもは、自分の力で他にも居場所を見つけていくことが必然的にできるようになる。そのため、本研究では広義の意味で居場所の定義を「精神的に安心できる他者と関わり、受け入れられていると感ずることができる場所」が居場所であるとし、研究を進めることとする。

### 1-3. 本研究の目的と意義

宮下・石川(2005)は学校内において居場所があると感ずる条件について調査した結果、学校内のいくつかの場所ではがみつき因子が見出されており、「そこにしがみつくしかない」「他に居場所がない」という否定的な場面が明らかになった。

杉本・庄司(2006)は居場所の有無と個人属性の関連を調べた結果、小学生の男子に居場所がない子どもが多いこと、中学生で何でも話せる家族がいないことが居場所の有無に違いがあることが明らかになった。

そのような居場所が不安定な子どもたちがいたことは明らかになったが、どこを心の拠り所として他に居場所をつくっているのかという点が明らかにされていない。そのため、居場所がないと感ずた経験のある子どもがどこに居場所を求め、立ち直ったのかを明らかにする必要がある。

そのため、本研究では大学生に、小学校から高校までに居場所がないと感ずた経験の有無、どこに居場所を求め、どのように回復したのかを質問紙によって調査し、現在、家庭や大学に居場所があるのかを明らかにする。それにより過去に家庭や学校で居場所がないと感ずた経験が、現在の家庭や大学内における居場所形成に影響を与えているかを考察する。

### 仮説

本研究では以下3つの仮説を立てた。この仮説を基に研究を行う。

- ①学年が上がるほど、居場所がないと感ずやすい。
- ②居場所がないと感ずた時、誰かの手助けがあれば、立ち直る傾向が高い。
- ③居場所がないと感ずた経験のある者は、現在においても家庭や大学に居場所があると感ずにくい。

## 2 方 法

### 2-1. 調査対象者

調査対象者は愛知県内の大学に通う教育学科と心理学科の大学生251名（男子55名 女子195名 無回答1名）について調査を行った。

### 2-2. 調査内容

#### 1 フェイスシート

性別、家族構成、祖父母との同居経験

#### 2 居場所がないと感じた経験について

「居場所がないと感じたこと」の有無（「学校や家庭（小学校～高校）で居場所がないと感じた経験はありますか？」について有無の2択）、小学校から高校までのどこに当てはまるかの3択、具体的な場面について、どこに居場所を求めたか、どのように立ち直ったかについて当てはまる箇所にチェックをつけてもらった。

#### 3 現在の居場所の有無について

現在における大学や家庭の居場所の有無の2択

### 2-3. 調査時期

2011年11月22日～12月7日

## 3 結 果

### 3-1. 居場所の有無について

家庭や学校で居場所がないと感じた経験の有無を性別別に2×2のクロス集計表によって集計した。その結果、過去、家庭や学校で居場所がないと感じた経験のある者は全体で約40%おり、居場所がないと感じた経験のない者は約60%いることがわかった（Table 1）。また、居場所の有無の経験と男女差について $\chi^2$ 検定を行ったところ、有意差は見られなかった。

Table 1. 居場所がないと感じた経験の有無と性別について

N=250 (人)

	男性	女性	合計 (%)
居場所がないと感じた 経験のある者	23 (9.2)	75 (30.0)	98 (39.2)
居場所がないと感じた 経験のない者	32 (12.8)	120 (48.0)	152 (60.8)
合計 (%)	55(22.0)	195(78.0)	250(100.0)

 $\chi^2(1) = .203$  n.s

## 3-2. 仮説について

## ①学年が上がるほど、居場所がないと感じやすい。

98名の内92名の有効回答者を対象に、過去に家庭や学校に居場所がないと感じた経験のある者が、いつ頃それを最も感じたのかについて一変量の $\chi^2$ 検定を行ったところ、有意差は見られなかった (Table 2)。

Table 2. いつ頃、居場所がないと感じたのかについて

N=92 (人)

	小学校	中学校	高校	合計 (%)
居場所がないと感じた 経験のある者	21 (22.8)	36 (39.1)	35 (38.0)	92 (100.0)

 $\chi^2(2) = 4.587$  n.s

また、発達段階別に児童期 (小学校) と思春期 (中学校、高校) について一変量の $\chi^2$ 検定を行ったところ、1%水準で有意差が見られた (Table 3)。

Table 3. 居場所がないと感じた時期について

N=92 (人)

	児童期	思春期	合計 (%)
居場所がないと感じた 経験のある者	21 (22.8)	71 (77.2)	92 (100.0)

 $\chi^2(1) = 27.174$   $p < .01$ 

## ②居場所がないと感じた時、誰かの手助けがあれば、立ち直る傾向が高い。

92名の有効回答者を対象に、過去に家庭と学校に居場所がないと感じた時、他に居場所を求め、立ち直ることができたのかについて Fisher の直接法を行った。その結果、有意差は見られなかった (Table 4)。

求め項目に回答あり×立ち直り項目に回答ありの72名を対象に、学生はどこに居場所を求め、どのように立ち直ることができたかについて、上位4項目を Table 5、Table 6 に示した。その結果、居場所がないと感じた時は、「一人部屋」や「自宅」「インターネット・漫画」を居場所とする者が高く、立ち直った経緯については、「自力でどうにかした」「学校の友人からの手助け」「両親からの手助け」が高かった。

また、Table 6 で挙げた立ち直り項目の上位4項目を、自力でどうにかした（「自力でどうにかした」と他者からの手助け（「学校の友人からの手助け」「両親からの手助け」「学校以外の友人からの手助け」）に分け、発達段階について Fisher の直接法を行った。その結果、10%の有意傾向が見られた（Table 7）。

Table 4. 居場所を求め、立ち直った有無について

N=92 (人)

	求め項目に回答	立ち直り項目に回答		合計 (%)
		あり	なし	
居場所がないと感じた経験のある者	あり	72 (78.3)	7 (7.6)	79 (85.9)
	なし	12 (13.0)	1 (1.1)	13 (14.1)
合計 (%)		84 (91.3)	8 (8.7)	92 (100.0)

Table 5. どこに居場所を求めたかについて（複数回答）

N=72 (人)

順位	項目	小学校	中学校	高校	合計 (%)
1	一人部屋	10	13	11	34(47.2)
2	自宅	9	14	8	31(43.1)
3	インターネット・漫画	4	8	10	22(30.6)
4	その他	1	4	6	11(15.3)

Table 6. 立ち直った経緯について（複数回答）

N=72 (人)

順位	項目	小学校	中学校	高校	合計 (%)
1	自力でどうにかした	8	19	16	43(59.7)
2	学校の友人からの手助け	8	8	6	22(30.6)
3	両親からの手助け	5	8	4	17(23.6)
4	学校以外の友人からの手助け	3	4	5	12(16.7)

Table 7. 立ち直り方と発達段階について

N=92 (回答数)

	児童期	思春期	合計 (%)
自力でどうにかした	8 (8.7)	35 (38.0)	43 (46.7)
他者からの手助け	16 (17.4)	33 (35.9)	49 (53.3)
合計 (%)	24 (26.1)	68 (73.9)	92 (100.0)

 $p < .10$ 

③居場所がないと感じた経験のある者は、現在においても家庭や大学に居場所があると感じにくい。

居場所がないと感じた経験のある92名の内83名の有効回答者を対象に、過去に家庭や学校で居場所がないと感じた経験の有無によって、現在、家庭や大学内に居場所があるのかについて、Fisherの直接法を行った。その結果、現在、家庭内の居場所について1%水準で有意差が見られた。また現在、大学内の居場所について5%の有意差が見られた (Table 8、Table 9)。

Table 8. 現在、家庭内の居場所の有無

N=83 (人)

	現在、家庭内の居場所		合計 (%)
	あり	なし	
過去に家庭に居場所がなかった	31 (37.3)	17 (20.5)	48 (57.8)
過去に家庭に居場所があった	33 (39.8)	2 (2.4)	35 (42.2)
合計 (%)	64 (77.1)	19 (22.9)	83 (100.0)

 $p < .01$ 

Table 9. 現在、大学内の居場所の有無

N=83 (人)

	現在、大学内の居場所		合計 (%)
	あり	なし	
過去に学校に居場所がなかった	51 (61.4)	22 (26.5)	73 (88.0)
過去に学校に居場所があった	10 (12.0)	0 (0)	10 (12.0)
合計 (%)	61 (73.5)	22 (26.5)	83 (100.0)

 $p < .05$

## 4 考 察

### 4-1. 仮説 ‘①学年が上がるほど、居場所がないと感じやすい。’ について

居場所がないと感じる時期については、中学校、高校の思春期の時期に多いことが明らかになり、‘①学年が上がるほど、居場所がないと感じやすい。’は概ね結果を得ることができた。

中学校、高校の時期は友人と大人との関係に阻まれ、心や体が成長する過程にある。それと同時に学校や家庭で居場所がないと感じる経験も多くなり、自分を認めてくれる他者の存在が不透明であると居場所を見出すことができない。思春期の子どもにとって居場所がないと感じる経験は、自分を支えてくれるものがなく不安で、脅威に脅かされている状態にあり、それが思春期の時期には顕著に感じやすくなると考える。

### 4-2. 仮説 ‘②居場所がないと感じた時、誰かの手助けがあれば、立ち直る傾向が高い。’ について

本研究で ‘②居場所がないと感じた時、誰かの手助けがあれば、立ち直る傾向が高い。’ という仮説は認めることはできなかった。

居場所を求める傾向として、多くの場合、「一人部屋」や「自宅」といった身近な家庭内で居場所を見つけている。家族との会話や趣味、TV、インターネットや漫画など嫌な出来事から少しでも目を背けることができる環境に、居場所を求める傾向があると推測できる。

立ち直り方については、「自力でどうにかした」が最も多く、「学校の友人からの手助け」「両親からの手助け」が順に多かった。居場所がないと感じたときに居場所を求めても、立ち直り方には当人の努力と他の人からの手助けという方向性の違いがあることが明らかになった。

発達段階から考えると、児童期は大人に依存している時期にあたるため、他者からの手助けが問題から立ち直るためには必要であり、周りが支えてあげる必要がある。思春期になると、精神的に自立していく過程にあるため、それ程周りからの支援を必要とせず、悩みの程度によって自分で解決方法に判断を下し、立ち直っていく。そのため、立ち直る手段には発達に応じた違いがあり、仮説を認めることができなかったと考える。

### 4-3. 仮説 ‘③居場所がないと感じた経験のある者は、現在においても家庭や大学に居場所があると感じにくい。’ について

‘③居場所がないと感じた経験のある者は、現在においても家庭や大学に居場所があると感じにくい。’は、概ね結果を得ることができた。

家庭や学校内で居場所がない経験を過去にしていなければ、比較的居場所を形成することは容易であるが、過去に居場所がないと感じた経験があると、現在でも居場所が作りにくいことが明らかになった。

家庭内に居場所がない者については、劇的な環境の変化が頻繁に見られないことや、両親からのプレッシャーはなくなっても、親子、両親、祖父母、兄弟姉妹間など家族関係の不和は解決さ

れておらず、家族間同士の揉め事、悩みが過去と今とであまり変化がないといったことが考えられる。また、大学に居場所がない者は、過去の人間関係の悩みやいじめといった問題が未だ、当人の心に傷を負わせている可能性がある。例えば、学校内でいじめられた経験がある場合、大学内でまた、いじめられるのではと不安になり、積極的に居場所を見出すことができないと考える。

居場所をつくっていくためには、自分の力で積極的に居場所を見つけていく必要があり、それは誰にも頼ることができない。そして、信頼できる人に出会うこと、気づくことも必要である。そのため、自分らしくいられる居場所を自分で見出していけるような積極性や、信頼できる人を見出すことが、過去に居場所がないと感じた経験のある者には十分に備わっていないのだと考える。

#### 4-4. 総合考察

本研究では小学校から高校までに家庭や学校で居場所がないと感じた経験のある者が、どこに居場所を求め、立ち直ったのかについて尋ね、現在、家庭や大学内に居場所があるのかを質問紙によって明らかにした。

その結果、約40%の者が家庭や学校に居場所がないと感じた経験をしていた。思春期の頃に居場所がないと感じた者が多かったが、別の所に居場所を見つけて、自分の力や周りの手助けによって立ち直っていた。居場所がないと感じる経験は、思春期の時期であるほど敏感に感じやすいが、その問題を高校までに乗り越え、現在では、自分で居場所を見つけるに至っている。また、大学に入学し、環境が変わったことや、友人、家庭内が以前より順調になり、現在、家庭や大学に居場所があると感じている。けれども、中には過去に、居心地がよいと感じられなかった空間には、居場所をつくりにくい傾向があることがわかった。これは、過去に居場所がないと感じた経験が、現在の居場所形成に影響しているといえる。本研究によって、居場所がないと感じた経験のある者の居場所を求める傾向を明らかにすることができた。

#### 4-5. 問題点および今後の検討

本研究から考えられる問題点として、子どもにとって人との関わりのおよそ大半を占めるのは、家族と学校の友人である。この両者との関わりが子どもの心身の成長を促すため、家族と学校の友人の両者を絡めて検討していくべきであった。具体的には物理的、心理的側面に居場所があるという考えの下、家族と学校の友人の両者を4つのタイプに分類を試みた (Figure 1)。



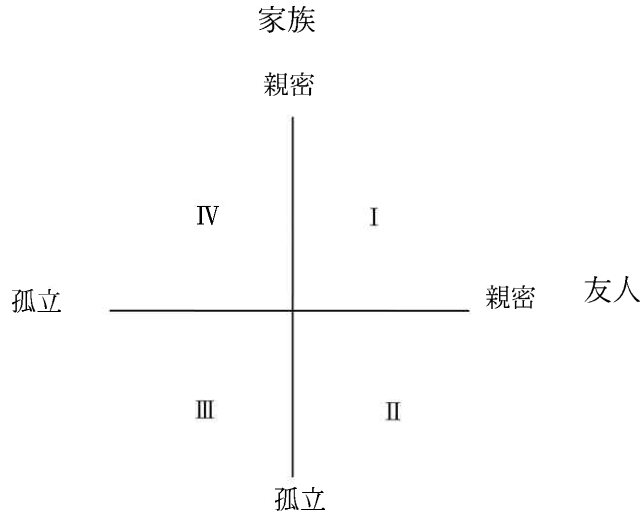


Figure 1. 家族と友人関係による心の居場所

I 家族が親密で友人が親密なタイプ…家族と友人の双方において関係が親密もしくは良好であれば、子どもにとってその空間は居心地がいいものとなり、そこにいたいと考える。これは心理的、物理的に共に機能しており、どこにでも居場所を持っている望ましいあり方である。

II 家族が孤立で友人が親密なタイプ…親の諸事情により子どもと接する機会が欠如している場合や、両親同士が仲良くないといった家族内の仲違いがある場合、子どもと家族との関係が希薄になり家においても安心できないため、子どもは他に居場所を求めようになる。学校であれば友人が優しく接してくれるため、そこにしか居場所がないと思いついで友人との関係に固執してしまう。そのため、もし、学校の友人との間にしか居場所がない場合、友人との関係が壊れてしまうと、自分を受けとめてくれる人がいなくなるため、精神的に不安定に陥ってしまうと考える。また思春期といった状況の場合は家族と距離を置き、友人との関係を重視することもあるため、こればかりではない。

III 家族が孤立で友人も孤立のタイプ…家族や友人との間に居心地の良い関係を築けていない場合、両者の中に居場所が見出せていないため、一人部屋や塾などの一人になれる空間や別の友人との関係に居心地の良さを見つけようとする。その場所に避難しながら、家庭と学校の中で再び居場所を再構築しようとする。けれども、長期に渡って、一人になれる空間にひきこもり、自分の殻に閉じこもれば、再出発を図ることは難しくなる。また、家庭や学校の空間にいることはできるが、人との関わりを避けて生活している場合は親しい人が空間にいないため、当人が居場所を作ることを諦めていると考えられ、居場所とはいえない。

IV 家族が親密で友人が孤立のタイプ…家庭内では家族と親密に過ごすことができるが、学校では友人ができにくい子どもがいる。土居（2005）は「家庭のなかで人間関係が培われて、その関係の延長線上に小学校というのがある」とし、家庭での養育が人間関係を形成する土台であることを示唆している。そのため、家庭と親密な関係を結ぶことは支えてくれる存在がいる安心感

につながり、長所である。しかし、家庭のなかで肝心の社会性が育っていないと、子どもは学校のなかで人間関係を形成することができず、友人との関係が上手くいかず不登校に陥ってしまう恐れがある。容姿や性格で友人から軽蔑される、無視されることもあるため、友人をつくりたくてもつけれない子どもここに含まれる。

家族と学校の友人との関わりについて各タイプで考えられることを更に思索し、家庭と学校が子どもにどのような影響を与えているのか今後、詳細に検討を重ねていきたい。

また、居場所を考えていくにあたり、逃げ場所も重要な着目である。逃げ場所は居場所の中に含まれ議論される傾向にあり、逃げ場所自体の概念定義が曖昧で、定義づけが難しい。例えば、安齊（2003）は乳幼児期の子どもたちを対象に「居場所」には相反する2つの方向性があると指摘し、「一つは、自分の自己像を修正し自立していく場としての『居場所』であり、その先にはいきいきと自己発揮することが予測されている前向きな『居場所』である。もう一つは、逃げ場所としての『居場所』であり、居られない場から逃げ出し立ち止まって心の安定を図る場としての『居場所』である」とし、前向き後ろ向きな「居場所」として密接に関係していると述べている。

確かに居場所には、逃げ場所としての機能を有する考え方も一理ある。けれども、居場所と逃げ場所を混同することは望ましいことではない。居場所にも定義があるように、逃げ場所には広義と狭義の意味があると考えられる。

まず、広義における逃げ場所は、居場所を複数持っており、心が沈んだ時にその場所に行くことが元気になる場所を指している。その場所から逃げ出して、別の場所へ避難した時、心を落ち着かせて再出発できるよう肯定的な思考を持たせてくれる回復機能を広義の意味での逃げ場所は持っている。広義としての逃げ場所には様々な例が考えられ、一人部屋・自室、塾、児童館、フリースクール、漫画やゲーム、インターネットといった幅広い場面が挙げられる。また、広義では一時的な避難場所という肯定的な側面を重視した逃げ場所なため、人との接触を頑なに拒否することはない。また広義の意味の逃げ場所は、他者との関わりがある居場所を含めた複数の居場所を指しているため、それらの居場所のいずれかに逃げ場所の機能を持っていることも想定すると、居場所と逃げ場所は密接な関係であると想定される。

次に狭義では、居場所を複数持っておらず、「今いる場所から逃げ出して違う場所に避難し、そこに固執し、永続的にいたい」と思う否定的な側面を指している。そこにいけば他者からの脅威がないため、その場所から出ようとせず、出ようとする勇気も皆無に等しい。狭義ではより一人になれる場所を好む傾向があり、一人部屋・自室、仮想空間が好まれやすいと考える。

広義はあらゆる所に居場所を持っており、心を回復するための居場所も必然的に持っていることを指し、狭義では特定の場所にしか身の置き場がなく、そこで心を回復するのではなく、自分の心の中にひきこもってしまうことを指す。そのため、逃げ場所といってもその機能に差異がある。

このことから居場所を持つことは必然的に逃げ場所も持つことにつながり、今後、居場所と逃げ場所の両面から、居場所とは何かを述べていく必要がある。

今後の方針として、居場所と逃げ場所の定義の明確化や、家族と友人関係による心の居場所 (Figure 1) の4タイプからより詳細に子どもの居場所を捉えていくことを課題としたい。

## 5 引用文献・参考文献

- 安齊智子 (2003) 「居場所」概念の変遷 (特集 乳幼児は心の拠り所をどのように形成していくのか) 発達 24 (96), 33-37
- 土居健郎・キャサリン＝ルイス・松田義幸 (2005) エンゼル叢書⑧甘えと教育と日本文化 P H P 研究所
- 石本雄真 (2009) 居場所概念の普及およびその研究と課題 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 3 (1), 93-100
- 石本雄真・倉澤知子 (2009) こころの居場所と大学生のアパシー傾向との関連 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 2 (2), 11-16
- 宮下敏恵・石川もよ子 (2005) 小学校・中学校における心の居場所に関する研究 上越教育大学研究紀要 24 (2), 783-801
- 杉本希映・庄司一子 (2006) 「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化 教育心理学研究 54, 289-299

※本研究は平成23年度教育学研究科修士論文を加筆・修正したものです。